

# 詩的表現の對象としての惡(ブレンターノ)

三 宅 實 譯

尊敬すべき諸君。

文學同好者の俱樂部が私を招いて講演せよとの事でした。俱樂部は一人の哲學者を招聘いたしました。そして、その招聘された哲學者は哲學者として俱樂部員の中へ現れる事しか望まれてゐないを、假定しても宜いと思はれます。

然し一人の哲學者が哲學者としてこの俱樂部に現れるといふ事の起るべき理由は一體那邊にあるのでせうか。多分自己の孤獨な考察の時間に於て此の、あるひは、彼の問題に關して私が如何なる結論に達し得たかを、たゞそれだけを諸君が聞かうと思はれるのでせうか。——でもその様な事をお聞きになつたからさて、殆ど諸君にまつて利益にはなりませんまい。と云ふのは哲學史の内に含れてゐる處の多様な仕方と相矛盾する雜多な者が一寸ばかり増された所で、何の價値をも持たないでありませうから。そこで若も今晚を何とかして有意義におくらうと思ふならば、私は單に私の哲學に關して諸君に報告するのを止めて寧ろ諸君自身の前で諸君自身と共に哲學する事(Philosophieren)を試みなければならぬのです。實際全く俗物でない限り、人

は各々の自己の内に何かしら哲學を持つてゐるものです。そして文學に於る美の友達も亦同様であるを考へられます。彼等は如何にして道學者的俗物たり得ませうか。彼等こそ正にその反對の軌道を行くものであります。私はこの事をしつかり胸にたたみこんでおきませう。

二

已にプラトン及びアリストテレスが認識しました様に、凡ての哲學的思想は驚異から發生するものです。この世に豊かに存在する偉大なる不可思議の一口でもぶつかり、其際若も人が魯鈍なる精神でないならば、その不可思議に驚異し、穩かならぬ心の内にその解決を願望する様になります。かくして人は哲學者となり、亦恐らく他の哲學者をも産み出すようになるのです。なぜなら、その解決が到達されなかつた場合には、疑問と驚異とは種族から種族へ遺傳されて行きますから。

今私の云つた事が文學に關してもあてはまります。已に古人が提出せる背理的現象は今日も尙一般的に満足なる説明を見出し得ません。そして詩的表現の對象としての惡を私達の考察の主題としようと思ふと述べた時に私が目指してゐるのは

かゝる竹理的現象なのであります。詩人は、藝術家の各々の様に、優秀なる價値の表象を私達の内に呼び起し、私達をしてこの價値を正常に感得せしめようとするのです。

扱て考へてみますと一般に諸表象の内に於ては一は他より內的に優れてゐるものです。より多く直觀的なる表象はより少く直觀的なる表象よりも價値的であり、内容に於てより豊かなる表象はより貧しき表象よりも價値的であります。豊富のため明白さを見通しとが失はれないならば、特に然か云へるでありませう。亦、より善きもの、表象はより少く善なるもの、表象並に悪なるもの、表象よりも價値ありき見做されてゐます。まことに、この最後の命題こそ疑ふべからざるもの、様に思はれてゐるのです。若もさうであるならば、詩藝術(Dichtkunst)の所産に關しても同じ事が確立されるであらうと期待せねばなりません。如何にも個々の場合に於て詩人は悪をも私達の眼前へもたらず事がございませう。だが大體に於て、殊に私達が最高のもので評價してゐる藝術作品に於て、——善は主として詩の表現の對象を形成せねばならないと考へられます。

然し私達は何を事實の上で見出すのでせうか。寧ろ全然反對のものが發見さればしないでせうか。

私達が先づ現代の藝術作品に注意を向けるならば、即ち幾度か版を重ねた小説及び幾つかの劇場の土間や棧敷を満たし觀衆を暴風の如き喝采にまで誘ひ行ける戯曲に注意するならば、それ等は主として損はれたる性格を取り扱ひ、まことに、厭ふ

べき精神病理學的狀態を題材としてゐます。人はこの事さ、より善なるもの、表象が普遍的に云つて、より價値的であるといふ法則を如何にして一致せしめ得るでせうか。

恐らく次のように答へる人もありませう。

かゝる現象は確かに私達を誤りに導くものではない。それは凡ゆる事物の絶えざる流轉にあつて、特に生けるもの、領域に於て悟性が事實上安穩を保ち得ざるが如き際に、しばしば必然的に現れねばならぬ様な趣味の一时的變體の結果に外ならない。惡の表現も亦多くの場合所謂流行的際者にして、趣味はその海神的變化に於て極端なるお道樂の一種へ移ろひ行くのである。そして悲むべき事にも正に現代がかゝる狀態に陥つてゐる。云はゞ人が健全なるものに飽和し、偏愛を以つて厭ふべき病的なるものへ向ふのである。だがそれに依つて人間自身の病的なる願望より外のなものも證明されはしない。か様な流行病が長く續く事なく、造形藝術(Glückliche Kunst)並びに抒説藝術(vedelnde Kunst)が、いち早く美しき藝術、美しき文學の名稱にふさはしき藝術作品を再び創作する事こそ願はしき事である。こゝに應答するでもありませう。

この場合に述べられた事には、多分ある種の眞理が含まれてゐるでありませう。特に。若も趣味が多くの場合邪路に陥るものであるといふ故を以つて個々の時代の現象がそれだけでは標準にならないといふ事、從つて私達の時代の現象も、自らかくの如きものであるといふ事が眞理として主張されるならば、殆ど

抗議の餘地さへなくなりませう。けれども私達が手近なものを超越して、文學史全體を眺めた場合に、一體、何を見出すのでせうか。私達が特に詩藝術の黄金時代と一般に價値付けられてゐる諸時代へ眼を移した場合に、一體何を發見するのでせうか。それ等の時代にあつても亦極めて卓越せる程度に於て、悪が奇妙な仕方の下に詩的表現の對象を形成してゐる様に思はれます。そしてこの事は、價値多きもの、表象が、一般に云つて、それ自身より價值的であるといふ定立に對する眞面目な、恐らく打勝ち得ない抗議と見做されるのでありませう。

已にアリストテレスが詩藝術の内の最も主なるものとして確立した處の二の種類に關して、即ち悲劇と喜劇とに關して事實をありのまゝの生きた姿の下に於て見てみませう。

先づ喜劇は如何なる事情の下にあるのでせうか。——喜劇詩人は好んで笑ふべきものを提出致します。だが笑ふべきものは何かしら、よこしまなるもの、様に思はれます。人は笑ふべき愚さ、笑ふに堪へたる臆病さ、無作法たるや笑ふべき、とか云ひまゝが笑ふべき聰明笑ふべき勇敢笑ふべき熟練等とは云はないでせう。喜劇詩人は卑俗なるもの、無骨漢、大酒家、馬鹿者誤解並びに最も賢明なる者をも不面目に陥しいる處の意地悪き偶然を私達に示すものなのです。たゞへ、テニールの如き諧謔家の和蘭人であらうと、バリー畫入滑稽新聞の諷刺的漫畫家的佛蘭人であらうと、一般に漫畫家と同じ様なものを畫くものであります。ですから、多くの人造はいつれもプラトン及

びアリストテレスも已にその内に屬しますが、笑ふべきものを直ちに厭ふべきもの、部類として理解しようとしてゐます。亦不正なる概念への抱擁が突然認識された場合に發生するものさ笑ふべきものを定義せるショーペンハウエルも、その定義によつて、結局他の人と同じ様な明白さを持つて笑ふべきものを何かしら惡なるもの、よこしまなるものと明記したのでした。たゞへ彼の限定が元來斬新なるもの、様に見えませうとも、亦アリストテレスは日常生活に於て常に私達が遭遇する人達よりもより惡しき人造を記述するのが喜劇であるさ述べてゐます。皆おしなべて、さうであるさは云ひませんが、とに角、アテナイ劇場の最も天才的なる喜劇詩人の藝術作品に對して、多分凡ゆる時代の最も天才的なる喜劇詩人の藝術作品に對してこのアリストテレスの言葉が明白に妥當するさ考へられます。例へばアリストファネスの藝術作品に對して確かにさう云へると思はれます。

私達は更に立ち入つて論を進めて行きませう。喜劇に關しては以上述べた様な事情であります。日常生活が眼のあたり敬へるよりも、より善き人間を私達に呈示するさアリストテレスに依つて批評されたるかの悲劇に就いては、一體如何なる論が成り立つのでありませうか。善しアリストテレスのこの教は、ある一定の制限の下に於てのみ考へられ得るのであります。悲劇に於ても一般に事實的現象と、より善きもの、表象の高次の價値とを一致せしめるのは容易でありますまい。

悲劇詩人は德行、他の氣高き活動、睿智の行動、國家の指導的賢明と力のみなならず。亦主として放埒なる不行跡や宿命的昏迷誠に狂氣の暗夜さへをも詩の内に盡き出すものです。そして悲劇詩人が德行を私達のために歌ふ場合にも、例へば、ソフォクレスが、アンテイゴネを、エウリピデスが純潔なるヒツホリユトスを歌へる如く、度々苦痛の内に於て、亦滅亡の内に於て德行を打べ歌ひます。かるが故に若しも惡といふ言葉を——實の處、惡は私達から發生しなければならぬのですが——その企き範圍に於て理解し、従つて私達にとつて當然好ましからぬものであり、それが實現された場合には必然的に私達を惱ましめる處の凡てのものをも其の言葉の下に含ましめるならば、この場合に於ても亦惡を歌ひ示す事となるのであります。悲劇が私達に主としてかゝる意味に於ての惡を示さないものとすれば、悲劇的といふ言葉が如何にして重大な、極めて感動的な不幸の記號として用ひられるのでせうか。亦私達の獨逸語が如何にして“Tangale (Tangalein)”をいふギリシヤの名稱を直ちに“Tanensiel”に依つて再現する様になつたのでございませうか。——更に喜劇的な言葉と同様に、悲劇的と云ふ言葉は造形藝術品へ轉用するならば、アキレウスの怒髮、罪の果實、革命に於ける滄茫たる場面、エルベルヒ山に於ける、責め柱の側に於ける、裁きの庭に於ける、あるひは十字架上に於ける惱める救世主若しくは他の歴史的人物の死を私達の直観にもたらす様な繪畫は確かに多くの場合悲劇的と名付けられるであり

ませう。

扱て最後に、私達は何を物語るべきでせうか。恰も悲劇は喜劇よりも更に多く、表象せられたるもの、優良性、愛らしさ、願はしき點に關してその表象自身が價值的増減を體驗する場合に、存在せねばならぬ事柄と相矛盾するかの様に思はれないでありませうか。——實際悲劇は、一方それ自身に於て高き價値を與へられてゐますが、他方已に喜劇よりも早く説明され難き哲理と見做され、且つ喜劇よりも更に——説明され難きパラドックスとして驚異の眼を以つて眺められてゐました。兎に角普通の意味に於て反價值的なるものを豊かに詩的表現の對象の内へ取り入れると云ふ事を類廢的左傾趣味に基いて理解せんとする王張は、以上の如き普遍的眞理の現はれに際しては、最早到底正當なる説明として許され得ないものとなりませう。

斯様に、たつた今この不可思議なる現象を、その全體の範圍に亘つて、ちらつと見渡して見ましたが、また新らしく當然受くべき驚異に私達は包まれてしまひました。そして幸にもその驚異と共に哲學的考察の最初の一步が踏み出されたのでした。然し私達は今や次の事を考へて見ればなりません。即ち私達の思索の歩みが更に深く續けられ、遂にこの不可思議が解決され従つて無智のための暗喏が獲得せられたる理解の心地よき、感情の下に消え去つて行くが如き最後の點へ到達し得るか、さうかを考察してみればなりません。

## 二

悲しい事にも時間か限られてありますし、この限られたる時間が不應なしに私達を最も本質的なるもの、みへ制限致しますので、いかにも二種の藝術のいづれをも顧慮せず全然打ち棄てる事が出来ないので、然しこゝでは、より高次の藝術(悲劇)に關してのみ多くの顧慮を拂ひ度いと思ひます。こゝ、云ふのはこの高次の藝術に於て若しも上の困難が解決せられるならば、多分何人も最早、大から小に至るまでの凡てをひつくるめて、それ等の普遍的解決を疑はないでせうから。

扱て悲劇が喜劇に對して、より高次の藝術であること云ふ事は一般に承認されてゐる事柄でありまして、恐らく人は二者の關係を次の様な仕方限定し得ると思つてゐるのです。

悲劇はよき意味に於ける眞面目なる藝術にして、喜劇は娯樂的のそれなのであります。たゞへ比較的眞面目なる内容を持つてゐようとも、喜劇はそれを洒落の形式や戯れの形式に於て取扱つてゐます。そしてその限り喜劇は「Komisch」なので、こゝにいます、悲劇的表象は人の心に喰入り、その魂を掴み去るものであるに反し、喜劇的表象はある程度に於て人の心を解放し、その魂の重荷を取り去るものなのです。前者は魂の重きタクトへ、後者は魂の輕きタクトへ導かうと試みます。喜劇的表象は悲劇的表象の様に、心情をしてその最も深き根底に於て感動せしめるが如き高揚をもたらさうと努めないのです。むしろそれは眞面

目なる思想系列を破壊し、力強き運動を、單に表面にのみ漣を立てるに過ぎない所謂彼の戯れに分解するものであります。

悲劇的表象と喜劇的表象とのいづれもが愉快なる保養と高尙なる満足とを與へるものではあります、喜劇詩人が與へる愉快なる保養のみが固有の意味の氣休めであり、彼が呼びおこす満足だけが笑となつて外に現れるものであります。

それ故に悲劇的藝術は偉大なる風格を好み、英雄の姿を呈示するに反し、喜劇的藝術は全く其の反對の行き方を致します。若しも喜劇が偉大なる風格を試み、英雄や神の姿を出現せしめる事があるならば、それは偉大なる風格を換骨奪胎し英雄や神を諧謔の種とするためなのです。

この故に、人は悲劇的なるもの、高次の品格を理解し、それと同時に他方、魂の重きタクトと輕きタクトとの間に於ける交代作用の確實性並にこの二のタクトの美的刺戟に依る淨化の確實性に基いて、喜劇的なるものも悲劇的なるものと並立し得る權利を保持してゐるといふ事を併せ了解する事が出来ます。

然し亦、悲劇的なるものは單に、悲しむべきものと同類でなく、喜劇的なるものも直ちによこしまなるもの若くは笑ふべき背理と一般でないこと云ふ事もそこから現れて來ます。この際悲しむべきもの、笑ふべきものは事實上、悲劇的なるもの及び喜劇的なるものに於て大きな役目を演じてゐるのでありますから、尙更餘計に上の事の根柢が問題になります。この問題が悲劇に關係する限り如何に言ひ表はされるべきでせうか。それは喜劇

の場合とは比較にならない程重要であり、特に研究者を迷路に導いたものなのであります。そしてその故にこそ私達は主として其の問題を取扱ふと思ふのであります。喜劇的領域に關しては、悲劇の場合とは反對に、ある一定の説明的觀點がたやすく見出されると思はれます。

#### 四

喜劇は魂の輕きタクトに奉仕するものです。そして些細なるもの、卑俗なるものに關係する場合には、特に容易に魂のかゝる輕きタクトが出現するのです。或時には嘲笑的に亦或時には優越性の好感を以つて、人は弱きもの、子供らしきもの、卑しきものを打ち眺めます。それ等をその卑俗性に於て直觀しつゝ、一瞬間相對的ではあれ、人は自分自身を崇高に感じるものです。朗な氣分にも支配されるものです。若も卑俗なるものが突然に且つ急激なる對照に於て現れるならば、朗なる氣分は外に現れて哄笑となつてしまひます。そしてこの哄笑は横膈膜の振動の引き起せる愉快なる隨伴感覺の反動作用に依つて快感ないやが上に高めて行くものなのです。氣輕になり度い、一度再び心から笑つて見度い、さ、いふ要求が、已に述べられた如き廣き範圍に於て喜に劇惡の現れる事を首肯せしめます。

然しこの際同時に尙他の立場から觀察されるべきでありませう。喜劇に於て如何に多くのよこしまなるものが歌ひ込まれてゐようとも、普通の場合には、その脚色は望ましき結果に終る

ものなのです。この事が私達の問題に對して如何なる意味を持つてゐるかといふ事は、シエクスピアが彼の喜劇の表題として與へた「終りが宜ければ凡てが宜い」といふ諺に依つて充分に言ひ表はされてゐます。

勿論個々の場合の内、例へば、モリエールのジョージ、ダンカンと彼のミザントロップとの様に、上の事劇普通の場合には喜劇の脚色は望ましき結果に終る(といふ)に反するものもある様に思はれます。たゞへ(貧しきダンカンが彼の高貴な配偶者に欺かれ彼の權利と幸福とに絶望しつゝ、自決し様と決心するのを讀みましても、若くは道德的に敏感なるアルケストが彼の最も親しき友達や全世界と不和になり、人間社會を密かに逃れ出るのを讀みましても私は少くとも愉快になる事が出来ませんでした。だが多分モリエールは常にこの事を勘定に入れてゐたのであります。——かかる表現が舞臺に於て喜劇的效果の助となるのでありませう。あるひばパリー人の氣質が當時に於てまことに今日に於ても尙さうであります。私の氣質とは比較にならない程多量の嘲笑的精神を持つてゐたのでせう。

そしてこの嘲笑的精神がかくして與へられた刺戟(反作用を起したのでせう、兎に角これ等の喜劇に對してライネケ狐及び同じ様な寓話詩に就いて云はれねばならない事柄があてはまれます。即ち、たまへ *das fahne doct* が明かに附加せられてゐないといへ、元來、利用概念の明瞭なる出現が結果をなしてゐると云ふ事をこれ等の喜劇に就いて云はれねばなりません。そ

して、この結末が善であり、望しき限り、「終りが宜ければ凡てが宜い」と云ふ、あの諺が再び正當なる適用を保つ事になります。

(一) かゝる仕方にて於て人は如何に生き、と自分自身を満足せしめ得るか。

(二) 亦全體の場面を、兎に角、斯様に悪化しつゝある場面をも何かしら望ましきもの、喜ばしきものとして迎へるべく運命付けられてゐる事を人が如何に力強く感じ得るか。

この二の事柄は、モリエールが、ミイザントロップをして凡ての眞面目なるものにさへ明白に不正なる判決が下されるのを期待せしめつゝ、次の様に語らしめてゐる場面に於て彼のミイザントロップ自身に依つて證明されてゐます。

“J'aurai le plaisir de perdre mon procès”

實際更に

“Je voudrai m'en coûter il grand” chose pour la beauté  
du fait avoir perdu ma cause.”

それ故に、これ等の場合に於ても、亦正しく理解されるならば幸福なる終結が物語られてゐると云ふても宜いのです。

## 五

けれども其の外に、表象の特殊の價値は專一に表象せられたるもの、優良性にのみ依存しないと云ふ事を私達の問題のため

詩的表現の對象としての惡(アレントター)

に常に念頭に置いておかれななりません。たとへ、喜劇的表象が卑俗なるものを内容となし、この卑俗なるものがアリストレンスも認めた様にある意味に於て喜劇的表象の價値を減少せしめるものでありませうとも、喜劇詩人は、眞に偉大なる藝術家である以上、他の觀點から見られたるその喜劇的表象の價値性に就いて顧慮を拂ふかも知れません。否、當然意を用ふるものなのです。私達に卑俗なるものを興へるにも關らず、特に喜劇的表象は有意味とも考へ得られます、蓋し喜劇的表象の私達に示せる物は類型的特性を有つてゐますから、喜劇詩人は意味深き個々の場合に於て、ある種の現象全體を私達に啓示するのです彼は私達に特殊的法則、恐らくその特殊法則と共に、亦特殊的法則の内に於てより普遍的なる心理學的・自然法則を啓示いたします。そしてこの普遍的心理學的・自然法則とは、この際心的に最も卑俗なるものに影響を興へてゐますが、それと同様に他の場合に於ては、心的に最も高次のなるものに向つても影響を及ぼすもののであります。言葉をかへて云へば、私達をして彼の立てたる反規則性の類型の内に、規則自身を直觀せしめるのが喜劇詩人なのです。然も喜劇の國にあつては、上の二の場合に各々偉大なる内容をたゞ戯れの形式の内のみ把握してゐます。

諧謔と諷刺との間の區別も亦以上の點にまで還元される、ミ云へるでせう。諧謔は心理學的・自然法則を直觀せしめ、諷刺は(倫理的・論理的、美的、あるひは其他の適當な名であれば何で

も宜いのですが、兎に角一の規則を直觀せしめます。諧謔家に依つて人は、しばしば氣輕さを味ひ諷刺家に依つては常に不愉快にされるのみなのです。諧謔家は私達の缺點をかつきり、當然なるもの、従つて許さるべきものとて現はし、之に反して諷刺家は私達の缺點を何かしら道理に合はぬもの、まことに、自己の背理のために殆んど信じられなくなつたものとて示します。諷刺家は私達をして反規則性に敏感ならしめ様とすればする程益々、自然自身が如何にして私達をそこへ導いたかといふ事を示さないものなのです。

それ故に、この様な固有なる對立は喜劇詩人として特に諧謔家であつた處のシエクスピアと、古代に於けるプラウツスやテレンツと同様に主として諷刺家であつたモリエールとの間に存在いたします。明かにモリエールは彼の取り扱へる缺點を比較的ではありませんが、殆んど辯解しませんでした、彼は人間の性格の靜學のみをあたへて、動學をあたへなかつたのです。彼にあつては人物が最初に現れて來るのと同じ仕方で最後に舞臺を見捨てるのです。然しシエクスピアを引き合に出しつゝ、以上の事に基いて、モリエールに非難を加へる事程不合理な事はありません。さ云ふのは、彼の諷刺の銳利なる力はむしろ本質的には、この人間の性格の靜學に依存するのですから。

この二人の詩人の對立が、かゝる點に關して、如何に大きいものでありませうとも、他方私達は次の點に於て兩人の一致を見い出します。即ち彼等はいづれも、よこしまなるもの、卑俗

なるものに於て、私達をして氣輕い保養を享樂せしめようとする場合には、脚色の望ましき、結末や他の仕方に依つて、亦特に、有意味なる内容に依つて、劇の全體に高次的價值を與へやうと努力してゐます。さなくともさへ劇の最高の地位を要求せざる喜劇に關する疑問に結論を與へるために、私達は恐らく充分な言葉を費し過ぎました。

## 六

今や私達の任務の内のより本質的なる第二の部分へ注意を轉じてみませう。より善なるもの、表象が、一般に云つて、より少く善なるもの、表象並びに惡なるもの、表象よりも價值的であるといふ原理が如何にして悲劇舞臺の事實上私達に示す事柄と一致し得るでせうか。

この謎の解決は悲劇が詩の最高の地位にあるために、特に困難であるかの様に思はれます。悲劇の任務は魂の重きタクトへ導く事であり、私達を高揚せしめる事に存します。ですから、人は悲劇的表象に於て最も高次なる、最も氣高き、最も淨福的なる現象、云はゞ最も神にふさはしき現象を期待しても宜いのです。けれどもそれは全く異つて、悲劇的表象は主として苦惱、滅亡、——しばしば最も卓越せるもの、滅亡——並びに情熱、惡行、狂氣をも私達に表示いたします。

尙その上に、もう一のパラドツクスが加ります。喜劇に於ては個々の事柄の凡ゆる背理にも關らず全體は少くとも一種の滿



足な姿を興へてゐるのに反し、悲劇に於ては、これが無い様に思はれます。あるひは、たゞ稀のみ存在する様であります。大抵の場合、悲劇の事件は深刻にして悲惨なる大團圓に終り、観客は悲みに満ちた魂を抱いて、劇場を立ち去ります。

## 七

偉大なる思想家に依つて基礎付けられ、今日に於ても尙權威を持つてゐる處の悲劇の理論があります。思ふに、それは悲劇の罪に關する有名な教義でありませう。そして若もこの教義が正しいならば、たつた今觸れられたる困難も幾分か緩和される事であらう。

滅び行く英雄は如何にも、全然同情に値しない普通の破戒者ではないが、然し矢張り悪人に違ひないのであつて、彼の苦痛は、正に灰色の運命として私達の感情を掻き亂すものであつてはならない、さ已にアリストテレスが要求いたしました。それ以來、亦、今日に至るまで、かゝる主張が幾度か繰り返されてゐます。

然しこの教義は直接的觀察よりも寧ろ心理學的反省に基いて組織されたものであつて、藝術史が實際教へる事柄と確かに一致してゐないのです。コルネイユは已に彼自身の經驗とこの教義との調和を保ち得ずして、この教義の意味を變更しつゝ、それを除き去らうと試みました。たとへば彼がその際、言語學的理解に關して、レンシンの非難を充分に受けるに値するものであ

りまして、他方益々多く私達の稱讃が彼の詩的洞察のために彼の上に注がれる事には何の變りもありません。コルネイユの著作のみならず、アテナイ劇場の最も卓越せる二、三の創作自身も亦アリストテレスの規則に反抗し、シエクスピアの最も靈感的なる諸々の詩も同じく明白にその規則に一致し難きものである事を自ら示してゐます。

多分諸君にまつて明瞭であるらしいこの主張を不可疑的なるものとすするため、次の一對の例が役立つと思はれます。

ソフォクレスの藝術作品の何かが私達の驚異を勝ち得ると思へば、それは確かに彼の作、アテナイゴーンであつて、このアテナイゴーンこそ古に於てアテナイの人達に極端なる感激を興へ、従つて彼ソフォクレスを凡ゆる榮譽に値せしめペリクレスと共に、サモス島への出征將軍に選ばれるに至らしめたのでした。扱つてこの戯曲の女主人公の死たるや、彼女は生きながらにして埋葬されたのでした。彼女の犯せる悪行のためにではなく、ある最も氣高き自己犠牲的行爲のために生理學的悲境に陥つたのでした。神の命令は人間の命令よりもより多く従順を要求するといふ確信を口々に發表し、行にも現したために、彼女は恐るべき悪漢の手に歸したのです。純粹な人間の道徳的感情を持ち合してゐる如何なるクリストも、如何なる自由思想家もこの點に於て彼女に抗議し得ないであらう。ゲーテもエツケルマンとの對話に於て「權利はアテナイゴーンの側に不當は全然クローン

道徳ではなくして國家の破壊者である」と説明いたしました。この事柄をゲーテとは異つた仕方の評價せるある教授の講演を如何にも私は憶ひおこす事が出来ませう。彼に依ればクレオンは恐らく全然不當であるが、アンテイゴネも正當であると同時に不當でもあるのです。神的法則と人間的法則との争鬪に於て、神的従順に身を捧げた限り、彼女は正當にして、そのために人間の法則に反抗せる限り不當である。と彼は考へておますこの様にして教授は幸にも悲劇と、悲劇の罪に依る有名無實の要求と、を一致せしめました。けれども諸君は彼の鋭き感覺に始ご驚かないでありませう。亦、諸君は遂に彼の言葉を通じて次の事を信するようになりませう。即ちこの教授ある教授は悲劇的なるもの及び喜劇的なるものに就いて餘り了解を持つてゐず、その上、かゝる知見に由つて、如何に彼自身を笑ふべきものとなしたかをも併せ知つてゐなかつたのでした。

尙一層立ち入つた證據として私達に役立つのはエウリピデスの戯曲であります。元來全體の仕方にて異なる者として、ソフォクレスに對立する處のこの意志堅固なる詩人はまことに彼の最も優れたるもの即ちヒツポリユトスを創作せる場合に於て、悲劇の罪に關する規則がソフォクレスと同様に彼をも束縛し得なかつたといふ事を、否定すべからざる明瞭さを以つて、私達に示してゐます。

諸君は唯かに木質に於てヒツポリユトスの脚色の徑路を知つてゐられるでせう。少くともラシイヌがその *Phèdre* に於て

作爲せる摸倣に基いて知つてゐられる事とせう。兩者の寓話は全く同一のものであります。たゞ各々の題名の差異が暗示する様に、ラシイヌにあつてはフェエドドラがエウリピデスにあつてはヒツポリユトスが主役を演じてゐるだけの差異があるばかりであります。この際私が主役だけを抜き出したのは、悲劇の罪に關する理論は主役にのみ當てはまるものですから、然しエウリピデスはラシイヌとは異つた仕方ではないが、まことに、更に深刻にヒツポリユトスを罪なき者、德行もて飾られてゐる者として現出し、純潔な氣高き青年、處女達が永久に繰り返つて來る祭典に於て、彼女等の鬚髮を彼の聖き追憶に捧げる處の青年として物語つてゐます。そして彼の德行、彼の純潔、彼の誠實こそ正に彼の滅亡となつたのでした。私達は感されたる彼の父の呪咀のために悲愴にも滅び行ける彼ヒツポリユトスを知つてゐます。

私は古代から、かくも明白なる證據を取り出しましたが、尙それに次いで近代からも古代の諸證據と同格視しても宜いような一の證據を引出して、みませう即ちシエクスピアの驚嘆すべき悲劇 *Romeo und Juliet* にそれでありませう。

思ふにこの戯曲は、詩人の意圖を全然誤り解せざる人達の眼を、シエクスピアに關して、開けるに相違ありません。

私達はこの戯曲の中で豊かな愛を惠れた無邪氣な人達を見出し、如何なる過失も愛すべき愛情深き若き配偶者達の心を苦めはしないでせう。教會は、祝福しつゝ、彼等の手を正し

き結婚にまで結び付けたのでした。それにも關らず情なき運命は無情にも彼等から幸福と生命を奪ひ去つてしまひました。彼等は兩親の意志に反して、ひそかに結婚したのでした。けれども無邪氣ならぬ氣質が彼等をしてかゝる運命にまで走らせたのではなくして、兩親間の相互の情熱的嫌惡がその源なのでした。

多分こゝに於ても、術學者は贖罪を要求する惡行を嘆き出すでありませう。だが彼は詩人の意向を如何に完全に誤解せる事よ！。そこには否認的感情が一寸でも現はされてゐる様な如何なる言葉もありません。寧ろ詩人はかの青年處女と對して最高の同情を感じ、且つ私達の内にもその同じ同情を呼び起さうとしてゐます。若き彼等二人は、その愛に於て家庭相互の不和の籬を飛び越え、彼等の死に於てその隔ての籬を豊かなる勝利の内に覆したのでした。なぜなら敵同志であつた父達が、餘りにもおそかりし後悔に打ち碎かれて、愛人の二の亡軀の上で、相互に和解の握手をさり交しましたから。

それ故に悲劇の罪に關する理論よ去れ！。已に述べた如くその理論は造形藝術に於て、十字架上のクリストの繪畫に依つて充分に反抗せられてゐるのでありますが、それと同様に詩 (Poetic) に於ても成立しないのです。それはありのまゝの姿に於て已に維持し難く、従つてそこから私達の昏迷に對して何等の救援も送られないのであります。

尙その上に、たゞへその理論が基礎付けられてゐる場合でさ

へも、悲劇の呈出せる罪と不幸とのある種の調和といふ善に關して、あるひは內的の墮落に於てあるひは外的の不運に於て現れる處の凡ゆる惡を、その任務に適しい様に、贖ふべく充分ではありますまい。そして勿論かゝる贖を完全になし得てこそ初めて、その理論の是認が權利付けられる様に思はれます。それ故に私達は他の説明根據に従つて研究を進めねばなりません。(未完)